

国民に反プーチン感情を駆り立てる（その2）

—プーチン大統領一家の資産状況、市民の反プーチン感情を促すか？—

主要点

ロシア大統領プーチン一家の私生活はこれまで極めて厳格に秘密にされてきたが、昨年来、次第に報じられるようになってきた。そこからみえてきたプーチン大統領の子供たちの生活ぶりは、困窮する市民の生活とは大きく乖離している。

経済の悪化に伴い市民生活がますます困窮化すると、市民生活と乖離するプーチン一家への反感が高まり、反プーチン運動への導火線の一つになる危険性がある。

1 秘密裏にされてきたプーチン大統領一家の現状

- ・プーチン大統領の資産は、申告による限り、とても富豪といえるものではない。しかし、実際の資産は？不透明である。

2 次女夫婦、巨大富を形成

- ・大統領一家のなかでひとときわ目を引くのは、次女の「エカテリーナ・チホノワ」とその夫、「キリル・シャマロフ」である。

- ・「キリル」は、つい最近（2月26日）、ロシア版フォーブズの調べで、2015年国家契約受注者上位10人のなかの4番目になったと伝えられた。政府関連会社の発注額（受注額）としては最大の取引を受注したためであったという。また、彼はフランスに豪華な別荘も所有。

- ・「チホノワ」はモスクワ大学で働き、「国立知的開発基金（NIDF）」と「国立知的財産センター（NIRC）」という2つの機関の責任者を務め、また、同大学のキャンパス拡張計画の監督にもなっている。最近、副学長代理に就任した。またダンスの組織委員会の責任者にもなっている。これらにはプーチンの友人である大富豪が関与。

- ・次女夫婦の富は巨額である。

3 長女一家の状況：妹に比し地味であるが - - -

- ・長女はオランダ人実業家と結婚し、「マリア・ファセン」と名乗っている。彼女はクライナ東部

でマレーシア航空 17 便が撃墜された後、夫と娘と共にモスクワに移り住んでいる。

- ・彼女自身、生体医学の専門家として、プーチン大統領の権力とは無関係で、一見、富とも無縁のように見えるが、彼女が勤める内分泌学研究センターは、慈善プロジェクト“アルファー・エンド”を運営しており、そのプロジェクトはプーチン大統領の友人が長を務めるアルファ銀行から資金提供を受けている。
- ・夫もモスクワ移住後、ガスプロム銀行などで働いている。
- ・長女「マリア」一家も、プーチン大統領の庇護のもとにあり、富の提供を受けている

4 プーチン一家の富、市民の反プーチン感情を促す恐れ

- ・プーチン一家は、プーチン大統領を中心として、同大統領の友人たちから有形、無形の支援を受け、富を形成しつつある。なかでも「エカテリーナ」と「キリル」の夫妻は、親の太い人脈のおかげで巨額の富を築きつつあり、急速に台頭するロシア新世代の代表格となりつつある。
- ・この状況を反感をもって見ている市民もいる。ロシア野党勢力指導者「アレクセイ・ナヴァルニ」もその一人であり、彼はこの状況を厳しく非難している。
- ・実際、プーチン大統領の義理の息子の資産形成には、疑惑が付きまとっている。
- ・次女の「エカテリーナ・チホノワ」になるとさらに疑惑が多い。29 歳という若さで、モスクワ大学の重要な計画に関わり、機関の責任者となり、副学長補佐にまで上り詰めたのは、確かに不自然さを感じる。
- ・プーチン一家の厳格に秘密にされていた状況が明らかになるにつれ、今後、ますます彼等の権力との癒着、そして富の集中が次第にロシア市民の目の前に明らかになっていくことだろう。
- ・指導者への富の集中化が、旧ソ連共和国の政権崩壊をもたらした他国の事例に照らして、大統領一家の資産状況については目が離せない。

国内外の関心をひくロシア大統領「ウラジーミル・プーチン」一家の私生活はこれまで極めて厳格に秘密にされてきたが、昨年来、次第に報じられるようになってきた。そこからみえてきたプーチン大統領の子供たちの生活ぶりは、困窮する市民の生活とは大きく乖離している。

この乖離ぶりはロシアの経済が悪化し、市民生活がますます困窮化すると、プーチン一家への反感が高まり、反プーチン運動への導火線の一つになる危険性がある。旧ソ連共和国の幾つかが冷戦後、革命によって崩壊したが、その革命は指導者への富の集中が市民の怨嗟を買い、それが革命を促した側面がある。ロシアの場合も例外ではなく、大統領一家の資産状況については目が離せない。

1 秘密裏にされてきたプーチン大統領一家の現状

まずプーチン一家の現状を概観しておきたい。

プーチン大統領は3年前の2013年7月、突如、「リュドミラ・プーチナ」と30年あまりの結婚生活を経て、離婚すると電撃発表した。

その「リュドミラ（58歳）」は驚くことに21歳も年下の実業家、「アルトゥール・オチェレトニー（37歳）」と再婚したらしいということが、今月初め、ロシアの独立系の雑誌ソベドニクによって報じられた。リュドミラの姓も「プーチナ」から「オチェレトナヤ」に変更されたという。そうだとすれば今後、「リュドミラ・プーチナ」の名は二度とお目にかかれない。

一方、離婚したプーチン（63歳）は、再婚の噂は未だない。しかし、オリンピックに出場した元新体操選手、「アリーナ・カバエワ（32歳）」との交際が以前から噂として流れており、昨年は2人の間に子どもが生まれたという噂まで流れた。しかし、ロシア大統領府は、プーチンのこうした噂を完全否定しており、その真偽のほどは依然藪の中である。

プーチンと前妻のリュドミラとの間には2人の子供がいる。いずれも女性で、長女（30歳）は「マリア・プーチナ」と言い、次女（29歳）は「エカテリーナ・プーチナ」と呼ばれていた。しかし、様々な諸事情から、現在の彼女たちの氏名は以前とは異なっている。

長女マリアは、「ジョリト・ジョースト・ファセン」というオランダの実業家と結婚し、その姓を名乗り、「マリア・ファセン」と名乗っている。

しかし、次女の場合は、少々複雑で、「エカテリーナ・チホノワ」と名乗る女性があり、その女性が「エカテリーナ・プーチナ」であるかどうか、長年、はっきりしなかった。ようやく昨年1月、ジャーナリストでブロガーの「オレグ・カシン」が、「エカテリーナ」はモスクワ大学で活動しており、祖母の姓に由来する「チホノワ」を名乗っていると伝えた。そして、ロイターも昨年11月、様々な聞き取りを行った結果、同一人物であることを確認し、ほぼ間違いなくその女性が次女の「チホノワ」だとみられている。

しかし、不思議なことに彼女は後で述べるロシア人実業家「キリル・シャマロフ」と結婚しているはずなのに、夫の姓を名乗っていない。ロイターが、『『エカテリーナ』は、『キリル・シャマロフ』と結婚しているのか？とロシア大統領府に書面で尋ねるほど、実は彼女の結婚ははっきりしないのである（大統領府は回答を拒否）。

2015年1月スイスで結婚したとの説もあるが、ロイターは、『『エカテリーナ』は、キリル（33歳）の『配偶者』と自身を称している』とのみ伝えただけだった。しかし、両者は一緒に行動している状況が多く伝えられていること、そして、プーチン大統領の娘、エカテリーナ自身が、「キリル」は夫だと周囲に述べていることから（キリルも大統領の娘である彼女のこの発言を無視することはできないだろう）、本稿では彼等を夫妻とみなしている¹。

このプーチン大統領一家の資産状況について、世間の注目が集まるのは自然なことである。

プーチン大統領の資産は、申告による限り、とても富豪といえるものではない。たとえば2014年の所得は765万ルーブルでしかなく、このほか保有している資産は2棟の質素なアパートと車庫の一区画に過ぎないという。黒海沿岸のソチに豪華な別荘が建てられ時、「プーチン御殿」だとして、世間の注目を集めた。しかし、大統領のために建てられたものではないとの釈明が大統領報道官から繰り返しなされたことで、大統領の隠し資産ではないかという大きな疑惑の問題に発展することはなかった。しかし、同別荘の建設には、プーチンの娘「エカテリーナ」の夫「キリル」の父親である「ニコライ・シャマロフ」が一部資金を

¹ 「エカテリーナ」は、「キリル・シャマロフ」との結婚が事実だとしてもそれは最近のことであり、それまで長く「チホノワ」の姓で大学やダンス界で活躍していた。このことから、世間周知の「チホノワ」の姓を使用している可能性がある。結婚届など公的な文書でこの件を確認することができるが、これに関する報道はこれまでのところ見当たらない。

提供している。しかし、これはあまり世間であまり注目されなかった。「ニコライ・シャマロフ」は、米当局がロシアのエリート層の個人銀行とみるロシア銀行の大株主である。

プーチンの友人の多くは大富豪となり、プーチンの子供たちもまた後で述べるように、桁外れの資産を保有する状況に照らせば、プーチンの資産がこれだとはとても信じ難い。ロシア市民もこれを信じているとは思えないが、これまでのところ一応大統領の申告を受け入れているようだ。実際のところ、プーチン大統領の真の資産はいかほどのものかは、全く不透明なままである。

2 次女夫婦、巨大富を形成

大統領一家のなかでひととき目を引くのは、次女の「エカテリーナ・チホノワ」とその夫、「キリル・シャマロフ」である。

ザ・ガーディアンはつい最近（2月26日）、プーチンの義理の息子、「キリル」が、ロシア版フォーブズの調べで、2015年國家契約受注者上位10人のなかの4番目になったと伝えた。

「キリル」が株式の18.6%を保有する「NIP ガスペレラボトカ」会社が、アムール地方に国営会社ガスプロムのガス製油所を建設するプロジェクトの受注に成功し、ガスプロム社と契約に調印した。契約額は7906億ルーブルで、この額は、伝えられるところでは、これまでの政府関連会社の発注額（受注額）としては最大の取引であったという。この契約によって彼は、「国営企業との契約王（複数人）」として、4番目にランクインしたのである。

キリルは、2014年にプーチンの友人が頭取を務める銀行から13億ドル（9億3400万ポンド）を借りて、やはりプーチンの友人である大富豪「ゲンナジー・ティムチェンコ」から大手石油化学会社「シブール」の17%に相当する株を購入した。この「シブール」社は、前に述べた「NIP ガスペレラボトカ」社の親会社である。「キリル」は6年前に同社の株式4.3%を取得していたことから、今回の追加購入によって、シブール社の総計21.3%の株を保有することになった。その評価額は今では、専門家によると、28億5千万ドルと評価される巨額の資産となっている。

「キリル」はフランス南西部にあるリゾート地ビアリッツに豪華な別荘を所有している。同別荘は「ティムチェンコ」が2007年に購入し所有していたが、3

年前に「キリル」に譲渡された（譲渡額は公表されていない）。この別荘の価値は約 370 万ドルとみられている。

一方、その妻（プーチン大統領の次女）「エカテリーナ」も夫に負けていない。

ロイターの取材で「エカテリーナ」は、父親の裕福な友人たちから支援を得て、相当な羽振りを利かせていることが明らかになった。

「チホノワ」は、同大学の工学・数学学部にも所属し、2011 年以降、彼女の名「チホノワ」で数学の教科書や少なくとも 6 つの論文の共同著者になっている。

フランスの別荘



しかし、彼女の実績、功績となるのは、同大学に関連する「国立知的開発基金（NIDF）」と「国立知的財産センター（NIRC）」という 2 つの機関の責任者を務め、また、同大学のキャンパス拡張計画の監督にも関わっていることであろう。

前に述べた 2 つの機関は、プロジェクト「イノプラクティカ」を運営しており、それは若手科学者支援を目的としているという。このプロジェクトが彼女の一つの功績になるのは、このプロジェクトには、プーチン大統領に近い多数の大物人物がアドバイザーやパートナーとして関わっているからである。「セルゲイ・チェメゾフ」（国営ハイテク会社『ロステック』の最高経営責任者（CEO））、「ニコライ・トカレフ」（国営石油パイプライン会社『トランスネフチ』のトップ）、「イーゴリ・セーチン」（国営石油大手『ロスネフチ』社長）、そして「アキモフ」（『ガスプロムバンク』頭取）等が名を連ねている。

実際に、これによって「チホノワ」が責任者となった 2013 年以降、NIDF はロスネフチ、国営原子力企業ロスアトム、トランスネフチから 1 億 8200 万ルーブル相当の契約を獲得している。

また、キャンパス拡張計画では、17億ドルの費用が掛かる計画で、ここでもプーチン大統領の側近5人の名が見え、同大統領が陰で同計画を支えている様子が垣間見える。

彼女はロシアのアクロバットロックンロール連盟で組織委員会2つのトップも務めている。ロイターによれば、連盟のスポンサーには、大手石油企業「シブール」、独立系天然ガス企業「ノバテク」、「ガस्पロムバンク」など、プーチン大統領の友人たちによって共同所有もしくは共同支配される企業が名を連ねており、その中には、「ティムチェンコ」や彼女の夫「キリル・シャマロフ」、キリルの兄「ユーリ」の名前もあるという。

ともかく「エカテリーナ」と「キリル」夫妻の資産は、現在極めて巨額になっている。

3 長女一家の状況：妹に比し地味であるが - - -

この妹夫妻に対し、長女とその一家は確かに地味である。謎に包まれたプーチン家族の中でも特に長女一家については秘密のベールに包まれていた。しかし、昨年11月ロイター通信によってプーチン一家に関する特集が組まれた後、今年になって、ロシアの各誌によって報じられるようになった。独立系ニュース週刊誌「ノーボエ・ブレミア」は2月1日付の最新号で、「マリア・プーチナ」の初めての写真を付けて特集記事を掲載した。

サンクトペテルブルグ大学で生物学を、そして、モスクワ大学で医学を学んだ「マリア」は、前に述べたようにオランダに滞在中、「ジョリト・ジョースト・ファセン」というオランダの実業家と結婚した。しばらくの間、オランダに住んでいたが、ウクライナ東部でマレーシア航空17便が撃墜された後、オランダを出国したという。現在は夫、娘と共にモスクワ中心部に居住している。

彼女は、「ファセン」という名で生体医学の研究者としてのキャリアを追及している。現在、モスクワの保健社会発展省付属の内分泌学研究センターに医学研究者として勤務しており、同センターでPhD候補となっている。

彼女はこれまで過去2年間で5個の研究の共同著者になり、今年初めには、ランバート・アカデミー出版社から発刊された子供の「突発性疾患発育阻止」と

いう本の共同著者にもなっている。

一方、彼女の夫、「ファセン」は以前、ロシアのガспロム銀行で働いていた。同銀行はロシア最大の非国有銀行で、ロシア三大銀行の一つである。そして少なくとも 2015 年の秋まで、ファセンはロシアのコンサルティンググループ「MEF 監査」に移り、副会長として務めていたことが同グループのウェブ上で確認されている²。しかし、現在なお副会長にとどまっているのかどうかは分からない。

彼女自身、生体医学の専門家として、プーチン大統領の権力とは無関係で、一見、富とも無縁のように見える。

しかし、彼女が勤める内分泌学研究センターは、慈善プロジェクト“アルファ・エンド”を運営しているが、そのプロジェクトは、米国、英国、及びキプロスに支店を持つアルファ銀行から資金提供を受けている。同銀行の最大の株主は、ミハイル・フリードマンで銀行業、エネルギー及びテレコムズの株を保有する大富豪で、プーチンの友人でもある。

また、彼女の夫が働いたガспロム銀行もロシアの天然ガス独占企業のガспロム（会長はプーチンの腹心の一人「ヴィクトル・ズブコフ」）の子会社であり、プーチン周辺のエリートと強いつながりを持つ銀行である。

プーチン大統領の長女「マリア」一家も、プーチン大統領の庇護のもとにあり、富の提供を受けていると言える。

4 プーチン一家の富、市民の反プーチン感情を促す恐れ

プーチン一家の富の形成は、ロシア市民の反プーチン感情を促す恐れがある。

これまでみたようにプーチン一家は、プーチン大統領を中心として、同大統領の友人たちから有形、無形の支援を受け、富を形成しつつある。なかでも「エカテリーナ」と「キリル」の夫妻は、親の太い人脈のおかげで巨額の富を築きつつあり、急速に台頭するロシア新世代の代表格となりつつある。

これが、長期化する経済の停滞下のもとで、困窮する市民の反感を買う恐れは

² ウェブサイト「リブ・ミント」（2015.11, 10）による。

ないとはいえない。現在は政権の厳しい監視下で、そうした市民の不満の声は、ほとんど聞かれない。しかし、反感をもってこの状況を見ている市民もいるのである。

たとえばロシア野党勢力指導者「アレクセイ・ナヴァルニ」がその一人であり、彼はこの状況を厳しく非難している。

「(彼らの台頭は) 政治や大企業を支配する恐れのある『新封建制度』である。子は親の地位だけでなく、望む地位なら何でも選べる権利をも受け継ぐ。重要な資源のすべてが、5から7つの一族に牛耳られる日が遠からず訪れるという危険をはらんでいる。」

さらにナヴァルニは、先月(2月)、プーチンに対する訴訟を起こした。彼は、「キリル・シャマロフ」がシブール社の株取得後、プーチン大統領はロシアの国家福祉基金から17億5千万ドルという安い融資をシブール社に割り当てられるよう命じたとして、大統領は反汚職法を犯したとして告訴したのである。

実際、「シブール」社の株の売買については、「キリル」が「シブール」社の株購入にいくら支払ったのか公表されず、その資金もどこから調達したのかについても明らかにされていない。さらにフランスの別荘の売買についても、その売買価格についても不明である。プーチン大統領の義理の息子の資産形成には、疑惑が付きまとっている。

次女の「エカテリーナ・チホノワ」になるとさらに疑惑が多い。29歳という若さで、「チホノワ」はモスクワ国立大学のキャンパス拡張計画にも関わり、同大学の若い科学者らをサポートするプロジェクトを運営する機関の責任者となり、副学長補佐にまで上り詰めた。これは確かに不自然さを感じる。昨年まで「チホノワ」がプーチンの次女であることも分からず、秘密裏の取り扱いで報道もされることがなかったことが、彼女が疑問視されなかった最大理由だと思われる。

これを知った「ナヴァルニ」は、早速、彼のブログに「モスクワ大学は腐敗しきっている」と書き込んだ。

プーチン一家の厳格に秘密にされていた状況が明らかになるにつれ、彼等の権力との癒着、そして富の集中が次第にロシア市民の目の前に明らかになっていくことだろう。

冒頭でも述べたが、冷戦終焉後独立した旧ソ連共和国の幾つかは、革命で崩壊した。困窮する市民の多くが指導者の富の集中化に不満を持ち、それが革命を起こす動機の一つになっている。2年前に起きたウクライナの革命も当時の大統領らが富の集中を図り、困窮する市民の怨嗟を買い、政権打倒を促す大きなうねりの背景となったのである。

旧ソ連共和国における革命は突然起きる。同国では普段、不満勢力に対する政権側の締め付けが厳しく、反政権の動きは潜在化している。そして、多くの場合、いったん声なき声が顕在化した時には、予想以上のスピードで政権崩壊の動きが始まるのである。

次第に巨大な富を保有するプーチン大統領一家の状況が明らかになるにつれ、市民の不満と怨嗟もまた間違いなく増大する恐れがある。

経済の悪化が長期化すればするほど、プーチン一家と富の関係については十分に見守る必要がある。